

博識無双の凜然たる人、北村裕教授

外国語学部教授
宇佐見 太 市

私の畏敬する人生の友、北村裕教授が満 65 歳の定年を迎えて本学を退かれる。言い知れない寂寥感を覚えてならない。

外国語学部の前身である外国語教育研究機構（2000 年 4 月発足）の機構長を 4 年半の長きに亘って務められた北村教授は、当時の学長コーナーならびに全学共通教育推進機構との度重なる交渉・折衝に骨身を惜しまず専心された。日本の外国語教育学に高遠な理想を掲げ、変通自在の才に長けた北村教授の犀利で俊敏な学内行政感覚は、類いまれなものであった。戦国時代の争乱の世に生きる武将の英姿そのものであった。解決すべきすべての懸案事項に対して北村機構長は、うわべを糊塗したり言い逃れたりせず、責任は一身に背負い、正々堂々と真正面から対峙された。志操堅く信義に篤かった。はたで見ていると清々しく、私は常に畏怖の念を抱かざるをえなかった。

北村教授は、学部・修士・博士と 9 年間、一貫して本学・英文科で学ばれた俊秀である。御専門は英語学だが、当時の関大英文科の英語学は、Philology の色が濃く、そのなかにあって敢えて Linguistics を志向された北村氏は、当時の大学院演習指導教授との関係で精神的にも肉体的にも苦悶なさったのではないかと推察する。若き日にそのようなご心労があったればこそ、後に御自身がドクターコース演習担当指導教授になられた暁には、真に心の深い教育者・研究者として誠心誠意、院生に親身に接しておられた。志と愛と使命感に溢れた、気魄の学究の徒である。

私は、北村教授とは学年で言えば一歳違いだが、私は大学入学の時点で恥ずかしながら二浪したので、私が 1976 年（昭和 51 年）本学ドクターコースに入学した時は（現、文学部谷口義朗教授と同期入学）、北村氏はすでに博士課程を修了しておられた（北村氏の時代は「博士課程修了」が正式名称で、三年遅れの私の場合は「博士課程後期課程所定単位取得後退学」が正式名称）。しかしなぜか北村氏は、本務校ご勤務のかたわら、大西昭男教授（後の学長・理事長）の英米文学の授業には毎週欠かさず出席されていたので、私はそこで北村氏と御一緒することになった。難解な英文の書き手として知られるヘンリー・ジェイムズの作品読解に際して北村氏の舌鋒は鋭く、英語英米文学界の泰斗・大西昭男教授に果敢に議論を挑んでおられた姿を今でも鮮烈に覚えている。

北村氏は、いっさい海外留学はせず、日本の英語教育の環境下で完璧な英語運用能力を修得された。また、パソコンなどといった言葉すら誰も知らず、IT関連機器が日本でほとんど普及していなかった時点で、北村氏は独学で果敢にコンピュータと格闘し、敢為の精神でみごとに日本の英語教育工学界の権威となられた。孤独の森に入り、自らと真摯に向き合い、苦難を窮めた英傑に、私は研究者の原点を見る思いがする。

1994年(平成6年)4月発足の本学総合情報学部の英語専任教員として、英語教育界の風雲児たる北村先生に白羽の矢が立ったのは、至極当然である。英語教育工学ならびに認知言語学の専門家として新設の総合情報学部で辣腕を振るうお姿は、すぐれて「知の人」そのものであった。北村先生は、常に自己抑制を心がけておられたようで、御専門以外の事はあまり活字にはされなかったが、私の知る限り、英米の文学や文化に造詣が深かった。だからこそ、海の向こうの研究者とも対等に勝負できたのだと私は確信している。実際、古典も含めて、現代英米文学作品をよく読んでおられた。やはり間違いなく北村先生の根っ子には、本学文学部の佳き学統が存在する。

当時、文学部英文学科教授であった私は、「教授」職がどうしても一名足りないという文部省教員審査がらみの理由で、急きよ、新設の総合情報学部への学内移籍を大学当局から懇願された。かの地で数十年ぶりに再会した私たちは、いわゆる弥次喜多コンビで総合情報学部の外国語教育の充実に日々、努めた。日本初のCNN教材開発の偉業も、北村先生主導のもとで実現した。当時のCALL教室の実質的管理・運営もすべて北村先生が仕切った。日本の外国語教育を牽引する英雄の聲咳に親しく接することのできた私は、果報者であった。

総合情報学部における北村先生は、教育研究面のみならず、行政面でも奔走し、大学当局と掛け合って、総合情報学部発足二年目に、竹内理先生(現、外国語学部長)という有為な研究者を他大学から招聘した。北村先生の先見の明の賜物である。

外国語教育研究機構発足を目前に控えた2000年(平成12年)2月28日に実施された初代機構長選出選挙は、いま思い返しても過去に類を見ない凄まじいものであったが、辛勝で初代機構長に選出された北村教授は、爾来、破邪顕正の情熱で本学の外国語教育研究のために、一身を賭して事に当たった。2002年4月発足の大学院外国語教育学研究科設立に際しても、奔走し、手を尽くしたあと、自らは研究科長に就こうとはされなかった。私心のない、まことに潔い先生である(織田稔先生が北村機構長に、初代研究科長として斎藤栄二先生を推挙された)。

その後、私が北村先生の後を受けて外国語教育研究機構長(二期目から大学院外国語教育学研究科長兼務)に選出されたが、6月の機構長選挙終了直後から、北村教授は私にフリーハンド外交を許してくれた。北村教授が院政をしくことは一切なかった。私は、身命を賭して諸改革に猛進した。私の言動を常に暖かく見守ってくださった北村教授は寛恕の人であった。

二人の内に秘めたる共通の夢は、新学部創設(外国語学部)であった。私の機構長時代、筆舌に尽くし難い苦勞に苦勞を重ねて丸三年半以上の歳月を要してやっとその夢(外国語学部創

設) が叶ったと判明したとき、すなわち、文科省からの設置「可」の一報を聞くやいなや、間髪を容れず私は、誰よりも真っ先に北村教授に電話で吉報を伝えたが、北村先生は電話の向こうで泣いて喜んでくださった。そしてお互いの恩師・大西昭男名誉教授のご仏前に手を合わせて報告したのは申すまでもない。二年後、私は深く考えるところがあり、創設した外国語学部の初代学部長職を続投はせずに一期で終えたが、権力に執着しなかった私心のない北村先輩を無意識のうちに真似たのかもしれない。

人間・北村裕に関しては、「知の人」であると同時に、「情の人」であったと思う。初代外国語教育研究機構長としての北村教授は、特に教員と学生との間に生じたトラブルには、人一倍時間をかけて慎重に対処された。学生の言い分を傾聴することもさることながら、学生から訴えられた教員の立場や気持ちをも真摯に汲み取り、人間的情愛を底に湛えて、常に的確で公正な判断を下された。私は、人の心をひきつけてやまない北村先生の侮るべからざる人間的力量・魅力の虜になった。

現在、本学部には竹内理学部長や山本英一学長補佐を初めとして、日本の教育・研究界を牽引する「知の巨人」が勢ぞろいしている。本学部の先生方の学術研究界ならびに社会連携の各分野での活躍の様子もつとに世に知れ渡っている。今や本学部は国内屈指の名門学部となった。これもひとえに北村教授のおかげである。外国語学部の礎である外国語教育研究機構の初代機構長を4年半務められた北村先生には感謝の念に堪えない。

知、仁、勇の三つの美德を兼ね備えた北村先生が今後、さらに健康に留意され、ご研究の成果を私たち後進に還元してくださることを切望してやまない。

北村先生にひたすら感謝の気持ちを込めて筆を擱く。